

オリゲネス『エレミヤ書説教』のギリシア語原典と ヒエロニムスによるラテン語訳の日本語対訳： 第14説教

加藤，哲平
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7411060>

出版情報：言語文化論究. 56, pp.101-127, 2026-03-18. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



オリゲネス『エレミヤ書説教』のギリシア語原典と ヒエロニムスによるラテン語訳の日本語対訳： 第14説教

加 藤 哲 平

本説教の緒論や翻訳の凡例については、加藤哲平「オリゲネス『エレミヤ書説教』のギリシア語原典とヒエロニムスによるラテン語訳の日本語対訳：第1説教」『言語文化論究』第52号、2024年、125-53頁を参照されたい。

第14説教（エレ15:10-19）＝ラテン語訳の第11説教

解説

第14説教は、エレ15:10-19を題材にした長編である（全18節）。第1節では、預言者が医者と比較されつつ、両者が治療の苦痛のために患者に憎まれることが説明される。第2節では、医者としての預言者が病人としてのユダヤ人によって告発されたことが述べられる。第3節では、文献学的な観点から、エレ15:10には「私は益さず、誰も私を益さなかった（οὐκ ὠφέλησα, οὐδὲ ὠφέλησέ με οὐδεὶς）」という一般的なテキストと、「私は借りず、誰も私に借りなかった（οὐκ ὠφείλησα, οὐδὲ ὠφείλησέ μοι οὐδεὶς）」というヘブライ語原典により近いテキストがあることが指摘された後、まずは前者に基づいて、教える者と聞く者との互惠性に関する解釈が示される。第4節では、後者のテキストに基づいて、貸し借り、すなわち義務を果たすか果たさないかに関する議論が展開される。第5節では、「災いだ、母よ」以降の一節がエレミヤではなくイエスについて言及されていることが説明され、第6節では、同箇所において「災い」などという忌むべきことを口にしたのは、神としてのイエスではなく人としての彼だったと論じられる。第7節では、キリスト者が裁かれるとき、キリストもまた裁かれていることが述べられる。第8節では、イエスを信じる者たちは彼に有罪判決を下さないが、彼を信じない者たちや、信じてはいても懐疑的な者たちは、彼に有罪判決を下すことが示される。第9節では、エレ15:10の「衰えた」という語がケノーシス思想（フィリ 2:7）に結び付けられて説明される。第10節では、イエスを受け入れて賛美する者の中ではイエスの強さが増し、逆に御言葉を呪う者の中ではそれが衰えると語られる。第11節では、イエスによる人間の罪の贖罪と、敵としての悪魔について短く述べられる。第12節では、罪人からの「略奪品」として自分たちに与えられた「宝」とは、神の子イエスに死刑判決を下したユダヤ人から取り上げられた預言者たちのことだと示される。第13節では、神がいかにユダヤ人に対して容赦なく振舞ったかが語られる。第14節では、預言者が罪人たちから侮られ苦しんだこと、キリスト者がそうした苦しみを

味わうことなしに「分け前」のみを求めるのは不正であること、そしてそれゆえにキリスト者は逃げずに預言者の・使徒的な生を得ようと努力すべきであることが論じられる。第15節では、神の言葉が将来的に「喜び」となること、そして神が「笑い戯れる者たち」たるユダヤ人の集いを棄て、自分自身のために「真面目な者たち」たる諸民族の集いを作ったことが述べられる。第16節では、エレ15:17の「私は独りで座っていた」の解釈、また同箇所「苦さ」に関連して、祝祭を祝うときに純粋さや真理としての種なしパンを、苦菜を添えて食べるの意味が説明される。第17節では、この世では権力者たちが預言者やキリスト者よりも強いことが述べられる。第18節では、傷がやがて癒されるように、関節の脱臼が医者によって戻されるように、外国にいた者が祖国に戻るように、部隊から追い出された者が自軍に戻るように、キリスト者は離反したとしても神がその者を回復させてくれることが論じられた後、祈りによって説教が締め括られる。

翻訳

「災いだ、母よ」について。「このことゆえに、主は次のように言う、『もしあなたが立ち帰るなら、私はあなたを元通りにするだろう』」まで。

第1節

(ギリシア語)

体の医者たちは、病人たちの傍におり、また常に自らを病人たちの治療に明け渡しているので、医療の技術の計画に従って、恐ろしいものを目にし、忌まわしいものに触れ、〈また〉他人の不幸から自分の悲しみを収獲し、そしてその生は常に危機的状況の中にあります。というのも、彼らは健康な者たちと共にいるのではなく、傷ついた者たちと共に、感染を持つ者たちと共に、〔そして〕膿、熱、さまざまな病気で満ちた者たちと常に共にいるからです。そしてもし誰かが医療を実行することを欲するなら、私たちが先に述べたような諸々の者たちと共にいる限り、不平を述べたり、自分が選択した仕事の目的を怠ったりしてはいけません。

しかし、この序文が私によって述べられたのは、預言者たちもまたいわば魂の医者であるからであり、また癒しを必要とする者たちがいるときに常に留まっているからです。というのも、「医者を必要とするのは、健康な者たちではなく、悪いところを持っている者たちである」(ルカ 5:31) からです。しかし、医者たちが放縱な病人たちから被っていることを、預言者たちや教師たちもまた、癒されることを望まない者た

(ラテン語訳)

体の医者たちは、病人たちの傍におり、また自分の技術の規律に従って、虚弱さの性質にある者たちを治療することを望んでいるので、恐ろしいものを目にし、不愉快なものに触れ、また他人の不幸による自分の悲しみに囚われています。というのも、彼らの振舞いは常に悲嘆の中にあり、常に不安の中にあるからです。彼らは豊かな者たちと付き合いを持つのではなく、傷ついた者たちに、さまざまな病気でその肉体が弱められた者たち、熱で熱くなった者たち、痛みで苦しめられている者たちに、絶え間ない奉仕を維持しています。そしてもし彼らのうちの誰かが医療を実行することを欲するなら、御言葉が先に述べた者たちと共にいた後でも、その者は腹を立てたり、自分の仕事の目的を忘れたりはしません。

それゆえに、これらのことを序文において私たちが述べたのは、預言者たちもまたいわば魂の医者であるからであり、また弱っている者たちがいるところに行くように常に命じられているからです、「というも、医者を必要とするのは、健康な者たちではなく、悪いところを持っている者たちである」(ルカ 5:31) からです。

ちから被っています。というのも、次のようなことから彼らは憎まれるのです、〔すなわち〕彼らが病気の者たちの欲求の目的に反して自ら命じているからであり、病気であっても病気に適ったものを取ろうとしない者たちが、贅沢をしたり享楽に耽ったりするのを彼らが禁じているからです。したがって、病人たちのうちの放縦な者たちは医者たちを避けるのです、しばしば彼らを罵り、中傷し、また敵が敵にするようなことを何でもしながら。というのも、彼ら〔病人たち〕は、彼ら〔医者たち〕が友人としてやって来ることを忘れてしまうからです、なぜなら、〔病人たちは〕その飲食の節制の痛みや、医者たちの鉄〔のメス〕からの傷の痛みには目を向けていますが、苦痛の後の結果に目を向けていないからです。そして彼らは〔医者たちを〕、単なる苦痛の父として憎んでいるのです、治療を受ける者たちを健康へともたらす苦痛の〔父として〕ではなく。

しかし、医者たちが贅沢な病人たちから被っていることを、預言者たちや教師たちも、癒されることを望まない者たちから〔されるのを〕耐えています。というのも、彼らは憎しみを持たれています、まるで彼らが弱っている者たちの欲求に反して命じているかのように、なぜなら、弱っていても弱っている者たちの食べ物を食べようとしない者たちが、贅沢やさまざまな食物を享受するのを彼らが禁じているからです。したがって、不従順でありかつ弱っている者たちは医者たちを避けるのです、そして彼らは中傷や侮辱によって〔医者たちを〕追ひ払い、そして誰かが自分の敵対者たちや敵たちにするようなことを彼らに対してまさにしているのです。というのも、彼ら〔病人たち〕は、彼ら〔医者たち〕があたかも敵としてやって来るかのように、彼らを忌み嫌っているからです、なぜなら、〔病人たちは〕あたかも苦痛や、飲食の節制が彼ら〔医者たち〕の管理から生まれることをただ望んでいるかのようであり、〔医者たちが〕極めて鋭い鉄〔のメス〕で体を切開することを〔ただ望んでいるかのようであるからです〕。そして彼らは彼ら〔医者たち〕を、そのような苦痛の作り手であるかのように呪っているのです、痛みからもたらされる健康の〔作り手として〕ではなく。

第2節

（ギリシア語）

かの民は、確かに、病気だったのです。神の〔民〕を名乗る民の中には、さまざまな病気がありました。神は彼らに対し、預言者たちを医者として遣わしました。医者たちの一人として、エレミヤもまたおりました。彼は罪人たちを非難していましたが、なぜなら彼は、悪を行う者たちが立ち帰ることを望んでいたからです。しかし、彼らは、言われていることを聞くべきだったのに、その預言者を告発し、彼ら自身によく似た裁判人たちの面前で〔預言者を〕告発しました。そして常にその預言者は審問の中にあっ

（ラテン語訳）

かの民は、それゆえに、さまざまな衰弱のために病気だったのです。神は彼らに対し、預言者たちを医者として遣わしました。医者たちの一人として、エレミヤもまたおり、罪人たちを非難し、かつ悪徳から徳へと立ち帰ることを望んでいました。しかし、彼らは、言われていることを聞くべきだったのに、逆に、彼ら自身によく似た裁判人たちの面前で預言者を告発しました。このことから、常にエレミヤが讒訴と悲嘆の中にあったということがあり、彼らの邪悪さに、自らに可能な限り、対処を行っていたの

たのです、彼の預言のゆえに癒されたのに、自分たち自身の不従順ゆえに癒されなかった者たちによって。次のように彼が言うときは、これらのことについてです、「そして私は言った、『私は主の名を語ることも呼ぶこともない。それは私の骨の中で炎を上げている燃える火のようになり、あらゆる方向から弱り、耐えることができない』」（エレ20:9）。一方で、彼は自分のことを、常に裁かれ、罵られ、訴えられ、偽証される者と見ているので、「災いだ、母よ。あなたは私をどんな者として産んだのか」（エレ15:10）と言うとき、彼は裁く者としてではなく「裁かれる者」として、区別する者としてではなく「国中で区別される者」として言っていたのです。そして、病人たちは、彼が適切にかつ医術的に助言するときには彼に耳を貸さないで、彼は「私は益さなかった」と言っています。そして、彼が話していたかの者たちは、聞いたことから益されるために、彼が霊的なお金を貸そうとしても聞こうとしなかったので、「誰も私に益さず、私も益さなかった」（エレ15:10）と述べています。

第3節

（ギリシア語）

しかし、先んじてこのことを私は言いました、「私は借りず、誰も私に借りなかった」（エレ15:10）という一節を語る前に。というのも、聖書は二重になっているからです。なぜなら、非常に多くの諸写本では、「私は益さず、誰も私を益さなかった」とありますが、一方で、非常に正確で、ヘブライ語〔の諸写本〕と一致している諸写本では、「私は借りず、誰も私に借りなかった」とあります。したがって、一般的であり、諸教会にもたらされているものを説明しなければなりません、ヘブライ語の聖書からのものを説明しないまま残しておかないようにしなければなりません。

そのとき、彼は言葉を宣べ伝え、〔しかし〕誰も言われたことを是認しませんでした。ちょう

です。しかし、自分たち自身の不信に従って今なおそのような病いにある人たちに、ときどき彼は言うのです、「そして私は言った、『私は主の名を語ることも呼ぶこともない。それは私の骨の中で炎を上げている燃える火のようになり、私はあらゆる方向から弱り、また私は耐えることができない』」（エレ20:9）。一方で、彼は自分のことを、常に中傷、叫び声、そして侮辱によって悩まされていると見ているので、「災いだ、母よ。あなたは私をなぜ男として産んだのか、国中で裁かれ、区別されるような」（エレ15:10）と彼は言います。そして、病人たちは、医術の原則に従いさえして適切に対処する者に耳を貸すことを軽視したので、彼は「私は益さなかった」と述べています。そしてそのうえ、聞き手たちは、有益さを得るために、また受け取ったことから果実を生むために、彼が霊的なお金を貸そうとしても受け入れようとしなかったので、「誰も私を益さず」（エレ15:10）と述べています。

（ラテン語訳）

しかし、これらのことを予期しつつ、私は言いました、「私は益さず、誰も私を益さなかった」（エレ15:10）という一節を語る前に。というのも、聖書は二重になっているからです。なぜなら、非常に多くの諸写本では、「私は益さず、誰も私を益さなかった」とありますが、一方で、より真正で、ヘブライ語〔の諸写本〕と一致している諸写本では、「私は借りず、誰も私に借りなかった」とあります。したがって、使用中であり、諸教会で読まれているものもまた説明しなければなりません、ヘブライ語の本で見つかるものに触れずに通り過ぎないようにしなければなりません。

エレミヤは神の掟を予言し、〔しかし〕誰も予言されていることに留意しませんでした。それ

ど、病人たちが放縱になるときや、自分の欲望を満たしているときに、医者もまた薬を無駄にしたように、彼もまた「私は益さず、誰も私を益さなかった」と言ったのです。おそらく、益する者に対し、益される者の人間愛ゆえに、互恵性が生まれるかもしれません。その結果、話す者もまた益されることになります、なぜなら、「幸いなのは、聞く者たちの耳に語る者である」（シラ 25:9）からです。したがって、聞く者たちが進歩し、より良くなることから、教師がこうした利益に関して益されるかもしれませんし、彼ら〔聞く者たち〕の中に成果を得ることで（ロマ 1:13）益されるかもしれません。〈こうしたこと〔利益〕をユダヤ人たちからは持たないため、エレミヤは言うのです、〉「誰も私を益さなかった」と。というのも、もし語る者が聞き手たちに成果をもたらすことが必要なのに、聞き手が誤解し、言われていることの外側にいるなら、「誰一人私を益さなかった」と言われるからです。なぜなら、彼はこうした利益に関して益されないからです、すなわち、益されている聞き手が益する者にとって成長や幸福の原因となることから益されるかもしれないような利益に関しては〔益されないからです〕。しかし、他にも、教える者は皆、学ぶ者が非常に知的である限り、教えることそのものに従って益されます、彼が教えることについて、彼が学ぶことについて。教えるを語る者たちは、彼らが伝えることについて、より力強くなります、聞き手が知的で、言われていることの意図をただ一般的に受け入れるだけでなく、調査し、質問し、探求するときに。したがって、「私は益さず、誰一人私を益さなかった」のです。

ゆえに、ちょうど、彼ら〔病人たち〕が〔医者の〕技術に従って治療されるのではなく、自らの意志に則って行動するときに、医者が病人たちに快くかつ容易に薬を与えるように、彼は「私は益さず、誰も私を益さなかった」と言ったのです。というのも、いわば、治療する者自身が恩恵を得るのです、もし彼が病人の中に自分の骨折りの成果を見るなら。そして精神の喜びを通じて、彼自身もまた有益さを得るのです、「幸いなのは、聞く者たちの耳に語る者である」（シラ 25:9）と言われていることを通じて。したがって、教師が自分の聞く者たちから得るこうした有益さに関して、もし彼ら〔聞く者たち〕が聞くことで進歩するなら、彼らの好意から彼がある程度成果を得ることで（ロマ 1:13）、エレミヤは、自分がこうしたことをユダヤ人たちからは持たないことを知っているので、「誰も私を益さなかった」と言うのです。というのも、もし私が言うことが聞き手たちを益することが必要なのに、言われていることを聞き手が投げ捨てるなら、私もまた「私は益さず、誰一人私を益さなかった」と言うのです。なぜなら、私はこうした有益さ、すなわち幸福にされた者が得た有益さを得なかったからです、彼が聞いている者たちの耳に語るときに。しかし、それは他のやり方でも理解されることができます。誰であれ生徒たちを教える者は、もし才能に溢れ、聞くという性質を持っている聞き手たちを持っているなら、教えれば教えるほど、より進歩するのです。なぜなら、彼ら〔聞き手たち〕は質問し、また彼が言ったことについてしばしば知ろうとするからです。言われたことの意味は何なのか、順序は何なのか、書かれていることの意味は何なのか、と。それゆえに、反対に、彼は言うのです、「私は益さず、誰も私を益さなかった」と。

第4節

（ギリシア語）

しかし、「私は借りず、誰も私に借りなかつ

（ラテン語訳）

しかし、「私は借りず、誰も私に借りなかつ

た」(エレ15:10) という一節を持つ、より正確な写本ゆえに、他の議論もまた必要になるので、このような本文を持っているものをも議論しましょう。「すべての人々に対して借りを返す」者、〔すなわち〕「恐れるべき者に恐れを向け、税を収めるべき者に税を収め、関税を収めるべき者に関税を収め、名誉を授けるべき者に名誉を授ける」(ロマ13:7) 者、そしてすべての人々に対して義務を果たす者〔がいます〕、その結果、その者は誰に対しても義務を負う〔借りる〕ことはありませんでした、彼が〈両親を〉両親として敬い、〈た〉とえば、兄弟たちを兄弟たちとして、息子たちを息子たちとして、司教たちを司教たちとして、司祭たちを司祭たちとして、助祭たちを助祭たちとして、信徒たちを信徒たちとして、教理教師たちを教理教師たちとして敬ったのであれば。もし彼がすべての義務を果たすなら、彼は借りがないということです。しかし、もし彼が義務を行うという借りがある〔義務を果たさなければならぬ〕のに、行わなかったら、「私は借りなかった」と彼が言うことはできません。というのも、彼は借りがあるのに、まだ返していないからです。では、私たちはどのようにして、「誰も私に借りなかった」の一節も議論することができるのでしょうか。私自身は貸していましたし、また霊的な財産を与えようとしていました。しかし、彼らは言われたことから離反しました。そして自分たちが借りることができるように、自分たちを受取人にしませんでした。このことゆえに、「誰一人私に借りなかった」のです。というのも、一体誰が言われたことを受け取ったりするのでしょうか、それを受け取ることによって聞いたことの借り手になり、言われたことの借り手として利息を請求されるために。したがって、このことを顧慮すると、聞き手が語り手から知的な銀貨を取り、それを借りることの方が、受け取るものもなく、取るものもなく、何も借りないことよりも、より善いのです。というのも、「誰一人私に借りなかった」ということすら、非難のようになって

た」(エレ15:10) という一節を持つ、より正確な写本ゆえに、他の議論もまた残っているので、この箇所も議論しましょう。「すべての人々に対してすべてを返す者」、〔すなわち〕「関税を収めるべき者に関税を収め、恐れるべき者に恐れを向け、税を収めるべき者に税を収め、名誉を授けるべき者に名誉を授ける」(ロマ13:7) 者〔がいます〕、そして彼はすべての人々に対してすべてを支払うのです、誰にも何ら義務を負っていないにもかかわらず。彼は、たとえば、両親を両親として敬い、兄弟たちを兄弟たちとして、息子たちを息子たちとして、司教たちを司教たちとして、司祭たちを司祭たちとして、助祭たちを助祭たちとして、信徒たちを信徒たちとして、教理教師たちを教理教師たちとして敬うのです。もし彼がすべての人々に対してすべてを返済するなら、彼は誰に対しても義務を負っていない〔借りていない〕ということです。しかし、もし彼が返済するべきなのに返済していないなら、「私は借りなかった」と彼が言うことはできません。というのも、彼は借りがあるのに、まだ支払っていないからです。しかし、続きの部分である「誰も私に借りなかった」に関しては、次のように理解されるべきです。私自身は〔利子付きで〕貸そうとしていましたし、霊的な財産を貸与しようとしていました。しかし、彼らは言われたことから自らの耳を離反させました。そして自分たちが聞いたことを私に借りることができるように、自分たちを教えやすい者として示そうとしませんでした。それゆえに、「誰も私に借りなかった」のです。というのも、もし誰かが言われている言葉を聞こうとするなら、彼は彼らの借り手とされ、また借り手として利子を返済することを求められてもしまいます。ここから、聞き手にとって教えの言葉を利子付きで受け取ること、そして借り手とされることの方が、受け取らないこと、借りないことよりも、より都合がいいのです。というのも、そうした者たちは非難されているからです、預言者が「誰も私に借りなかった」と言っている

しまうからです。

第5節

(ギリシア語)

しかし、「災いだ、母よ、どんな者として私を産んだのか、全地において裁かれ、疑われる者としてか」(エレ15:10) という一節を、エレミヤに対して言うのと同じように他の預言者たちに言うことは、適切であるとは私は思いません。というのも、預言者たちの多くは、ある程度の時の後で、悪の後で、罪の後で、回心をしてから預言し始めましたが、エレミヤは若いときから預言しているからです。そして書かれた諸々のことから例を与えることが可能です。イザヤは「次のようなことを」聞きませんでした、「私があなたを胎の中に形作るより前に、私はあなたを知っていた。そしてあなたが子宮から出てくるより前に、私はあなたを聖別した。私はあなたを諸国民のための預言者として立てた」(エレ 1:5)。彼「イザヤ」は「次のようなことを」聞きませんでした、「私は語るべきことを知らない、なぜなら私は若いから」(エレ 1:6)。しかし、彼が彼の預言の中に書き記された幻を見たときには、彼は「見て、」[次のようなことを]言いました、「災いだ、私は不幸だ、なぜなら、私は汚れた唇を持ちながら、汚れた唇を持つ民の間に住む。そして私は王を、サバオートの主を、私の目で見たと、彼曰く、「セラフィムの一体が私のところに遣わされてきて、私の唇に触れ、言った、『見よ、私はあなたの不正を取り除いた、そしてこのことはあなたの罪を清める』と」(イザ 6:5-7)。したがって、彼が前に行った罪(の後で)、イザヤは後に聖霊に相応しくなり、預言したのです。そして、あなたは他の者についても似ていることを見つけるかもしれません。しかし、エレミヤはそうではないのです。というのも、彼はまだおむつのときから預言の霊で飾られていたので、幼い頃から預言したのです。それゆえに、彼は、「災いだ、母よ、どんな者として私を産んだのか、全地にお

うに。

(ラテン語訳)

しかし、「災いだ、母よ、なぜ私を産んだのか、全地において裁かれ、隔てられる者としてか」(エレ15:10) と彼が言っていることを、エレミヤに対してと同じように他の預言者たちに対して適用させることを、私は考えることはできません。というのも、預言者たちの多くは、ある程度の時の後で、最初は悪いのですが、それからやがて罪の後で、回心してから預言し始めましたが、エレミヤは子供の頃から占いの始まりを掴んだからです。そして私はこのことについて聖書から証拠を取ることができます。イザヤは「次のようなことを」聞きませんでした、「私があなたを胎の中に形作るより前に、私はあなたを知っていた。そしてあなたが子宮から出てくるより前に、私はあなたを聖別した。私はあなたを諸国民のための預言者として立てた」(エレ 1:5)。彼「イザヤ」は「次のようなことを」聞きませんでした、「私は語るべきことを知らない、なぜなら私は若いから」(エレ 1:6)。しかし、幻が自分に啓示されたとき、彼は「次のようなことを」言いました、「災いだ、私は不幸だ、というのも、良心の呵責に苛まれているからだ。なぜなら、私は汚れた唇を持ちながら、汚れた唇を持つ民の間に住む。そして私は王を、サバオートの主を、私の目で見たと。セラフィムの一体が私のところに遣わされてきて、私の唇に触れ、言った、『見よ、私はあなたの不平等を取り除いた、そして私はあなたの罪を清めた』と」(イザ 6:5-7)。したがって、彼の以前の罪は清められ、またイザヤは聖霊に相応しくされた上で、預言したのです。もしあなたが他の者たちについても問うなら、あなたは似たようなことを見つけるでしょう。しかし、エレミヤはそうではないのです。というのも、彼はまさに揺りかごのときから聖霊で満ちた者として、預言し始めたのです。それゆえに、彼は、「災い

いて裁かれ、疑われる者としてか」(エレ15:10)と言ったのです(というのも、私は最初に一般論を論じるからです)。

しかし、私より前の者たちのうち、ある者〔フィロン?〕はこの箇所について言及して、彼〔エレミヤ〕がこのことを言ったのは血のつながった母親に対してではなく、預言者たちを産んだ母親に対してだったと言っています。しかし、神の知恵〈以外〉に誰が預言者を産むでしょうか。したがって、彼は「災いだ、母よ、どんな者として私を産んだのか」と言ったのです、おお知恵よ。知恵の子らは福音書においても、「そして知恵は彼女の子らを遣わす」(マタ11:19、ルカ11:49、同7:35、『ヘブライ人福音書』?)と書かれています。したがって、[次のように]書かれているのです、「災いだ、母よ」、つまり私の知恵よ、「どんな者として私を産んだのか、裁かれる者としてか」と。そのような者に生まれた私とは誰でしょうか、地上のすべての者たちに対する審問によって、非難によって、教育によって、裁かれ、疑われるために。もしエレミヤが「どんな者として私を産んだのか、全地において裁かれ、疑われる者としてか」と言っているとしても、私は「全地において」という一節を論じることはできません。というのも、エレミヤは全地で疑われたわけではないからです。それとも、私たちは「全ユダヤにおいて」の代わりに「全地において」と、強制されて言っているのでしょうか。というのも、彼の預言は、彼が預言していた当時、全地へと届いていなかったからです。おそらく、他の無数の箇所において我らの主イエス・キリストの代わりにエレミヤが語られていることを私たちが示したように、ここでも私たちは言うことができます。始めのところで、私は、「見よ、私はあなたを今日、諸民族と諸王国の上に置いた、根絶し、破滅させ、滅ぼし、再建し、植えるために」(エレ1:10)という一節にしるしをつけました。このことをしたのはエレミヤではありませんでした。イエス・キリストこそが〔地の〕罪の王

だ、母よ、なぜ私を産んだのか、全地において裁かれ、隔てられる者としてか」(エレ15:10)と言ったのです(というのも、一般的な理解に従って、私たちは最初に説明しなければならないからです)。

しかし、ある者〔フィロン?〕はこの箇所を解釈して、預言者がこれらのことを言ったのは血のつながった母親に対してではなく、預言者たちを産んだ母親に対してだったと言っています。彼はまた、神の知恵以外に預言者たちの母は他にいないと言っています。その知恵に対して、彼は「災いだ、母よ」と言ったのです。あたかも彼は「なぜあなたは私を産んだのか、おお知恵よ」と言っているかのようです。実際に、私たちは知恵の子らのことを他のところでも読むことができます、聖書が「知恵は彼女の子らを遣わす」(マタ11:19、ルカ11:49、同7:35、『ヘブライ人福音書』?)と言うときに。彼は言っています、「災いだ、母よ」、つまり私の知恵よ、と。彼はあたかも、「なぜ私を産んだのか、裁かれる者としてか」と言っています。そのような者に生まれた私とは誰でしょうか、叱責によって、非難によって、教育によって、裁かれ、隔てられるために、私が地上に住む者たちを正そうと努めているときに。もしエレミヤが「なぜ私を産んだのか、全地において裁かれ、隔てられる者としてか」と言っているとしても、私は「全地において」とは何かを説明することはできません。というのも、エレミヤは全地から裁かれたわけではないからです、おそらく、聖書を乱暴に解釈して、「全ユダヤにおいて」の代わりに「全地において」と表現されているなどと、私たちが主張しない限りは。というのも、彼の預言は当時、全地へと届いていなかったからです。おそらく、他の多くの箇所において私たちが示したように、私たちの主イエス・キリストの代わりにエレミヤと表現されているなどと、この箇所においても私たちが解釈しない限りは。この本の始めのところで、私は、「私はあなたを預言者として諸民族に置いた、諸王国を

国を根こそぎにし、悪の建物を破壊し、それらの諸王国の代わりに、[私たちの] 義と、私たちの魂の中にある真理を支配することをなしたのです。したがって、これらがエレミヤよりもキリストについて報告していることがより適当だったように、他の多くのものも、これらのことも、同じように私は考えます。

第6節

(ギリシア語)

まずは「災いだ」について語られるべきです、〈もし〉悪口のような性質ゆえに、救い主が、他の者たちを不幸だと言うときでさえ、「災いだ」と言うことがあり得るなら。私たちは、救い主の他には何ものとも結び付かない、認められた本文から説明します、どんなやり方で彼がエルサレムのために泣きさえたのかを。しかし、泣く者の声こそが「災い」なのです。また福音では次のようにされています、すなわち、「エルサレムを見たとき、彼はそれのために泣いた」(ルカ19:41)、そして彼は言いました、「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた者たちを石で打ち殺す者よ、何度私はあなたの子供たちを集めようとしたらうか」(マタ23:37) などと。しかし、明らかに、これらのこともまた救い主によって、次の一節で言われています、「災いだ、私は収穫時に藁を、また葡萄の収穫時に葡萄の摘み残しを集める者のようになってしまった、初物を食べることができないような穂がないときに。災いだ、魂よ、なぜなら敬虔な者は地から滅び、真っ直ぐ生きる者は人々の間に存在しないからである。すべての者たちは血に向かって裁かれている」(ミカ7:1以下)。というのも、彼は収穫するために、収穫のときに「藁を集める者として」 来ましたが、多くの罪人たちを見つけて、「災いだ、私は

根絶し、破滅させ、滅ぼし、再建し、植えるために」(エレ1:10) と言われていることに、注釈をつけました。ところで、このことをしたのはエレミヤではありませんでした。そうではなく、私たちの主イエス——罪の王国を根絶した方、不品行の建物を破壊した上で——が、私たちの魂の中で正義と真理を支配させたのです。したがって、これらがエレミヤよりもキリストにより適合しているように、他の多くのものも、今言われているものも、主について言及されているに違いないと私は考えます。

(ラテン語訳)

そしてまずは確かに、もしそれ、すなわち「災いだ、母よ」が主に帰されるなら、不適切で冒瀆的であるように見えることを、他の者たちを憐れむ私たちの救い主が言うことがあり得るかどうかが見られなければなりません。このことが証明されるためには、明らかに、救い主の他に誰も適合する者はいないという証言が示されるべきです、つまり、エルサレムを見たとき、それのために泣いた彼のような。というのも、彼は言いました、「エルサレム、エルサレム、お前は預言者たちを殺し、自分に遣わされた者たちを石で打ち殺す」(マタ23:37)、などと。しかし、さらに、明らかに、救い主によって言われていることもあります、「災いだ、私は収穫時に藁を、また葡萄の収穫時に葡萄の房を集める者のようになってしまった、食べるための葡萄の房、葡萄の初物が余っていないときに。災いだ、魂よ、なぜなら畏れる者は地から滅び、真っ直ぐ生きる者は人々の間に存在しないからである。すべての者たちは血において裁かれている」(ミカ7:1以下)。というのも、彼は果実を収穫するために来ましたが、あたかも多くの罪人たちゆえに穀物の中に見つかる藁のように、「災いだ、私は収穫時に藁を集める者のようになってしまった」と言うのです。彼は人間たちの中で葡萄の房を摘むために来ましたが、収穫の中に

収穫時に藁を集める者のようになってしまった」と言うのです。彼は人間たちの中で生命の果実を収穫するために来ましたが、私たちの中に多くの罪人たちを見つけて、「また葡萄の収穫時に葡萄の摘み残しを「集める者のようになってしまった」、初物を食べることができるような穂がないときに」と言うのです。彼はどこか他のところでも、これらと似たようなことを父に向かって言っています、「どんな利益があるのか、私の血に、私が滅びへと下ることに」(詩29 [30]:10)。なぜ私はそれほど大きな利益を人々に与えたのでしょうか。なぜ彼らは、私が彼らのために注いだ血に値することをしたのでしょうか。「どんな利益があるのか、〈私の〉血に、私が下ることに」。私は天から下り、地上に来て、自分自身を滅びに委ね、人間の体を手に入れたのです。どんな価値があるのでしょうか、彼らが人々のために真っ直ぐに生きることに。「どんな利益があるのか、私の血に、私が滅びへと下ることに」。塵があなたを称揚してはいないでしょうか、あるいはあなたの真理を知らせてはいないでしょうか(詩29 [30]:10参照)。したがって、このようなことこそが、救い主によって最初にここで「災いだ、母よ、どんな者として私を産んだのか」(エレ15:10)と言われていることでもあるのです。救い主は、神である限りにおいて「災いだ、母よ」と言っているのではなく、人である限りにおいて、預言者におけるのと同じように、「災いだ、魂よ、なぜなら敬虔な者は地から滅びたから」(ミカ 7:1以下)と言っているのです。しかし、魂とは人間的なものでした、それゆえに「〔魂は〕かき乱された」(ヨハ12:27)のであり、それゆえに「〔魂は〕苦しい」(マコ14:34、マタ26:38)のものであったのです。しかし、「初めに神と共にあった」(ヨハ 1:2)御言葉は、かき乱されはせず、それは「災いだ」などと言わないことでしょう。というのも、御言葉は死を受け入れることはなく、むしろ人間的なもののこそがそれを受け入れるものだからです、私たちがしばしば説明したように。

悪人たちが見つかったために、「また葡萄の収穫時に葡萄の房を「集める者のようになってしまった」、食べるための葡萄の房、葡萄の初物が余っていないときに」と言うのです。彼はどこか他のところでも、これらと似たようなことを父に向かって言っています、「どんな利益があるのか、私の血に、私が滅びへと下ることに」(詩29 [30]:10)。なぜ私はそれほど大きな利益を人々に与えたのでしょうか、彼らは私が彼らの救いのために注いだ私の血から何ら受益していなかったというのに。どんな有益さがあるのでしょうか、〈私の〉血に、私が天から下ることに、私が地上に来ることに、自らを侮辱で苦しめることに、人間の体をもたらすことに。これらすべてに値するどんなことが、人々の間で遂行されたのでしょうか。「どんな有益さがあるのか、私の血に、私が滅びへと下ることに。塵があなたを認めてはいないだろうか、あるいはあなたの真理を知らせてはいないだろうか」(詩29 [30]:10参照)。したがって、このようなことこそが、エレミヤにおいて「災いだ、母よ、なぜ私を男として産んだのか」(エレ15:10)と言われていることなのです。救い主は、神であることに従って「災いだ、母よ」と言っているのではなく、人であることに従って、他の預言者におけるのと同じように、「災いだ、魂よ、なぜなら畏れる者は地から滅びたから」(ミカ 7:1以下)と言っているのです。しかし、「かき乱され」(ヨハ12:27)、死に至るまで「苦しい」(マコ14:34、マタ26:38)のは人間的な魂であって、「初めに神と共にあった」(ヨハ 1:2)御言葉——それは決して悲しまず、決して混乱せず、決して「災いだ」などと言いません——ではありません。というのも、御言葉は死を受け入れることはなく、むしろそうした状態を被る人間こそがそれを受け入れるからです、私たちがしばしば説明したように。

第7節

(ギリシア語)

「どんな者として私を産んだのか、全地において裁かれ、疑われる者としてか」(エレ15:10)。もしあなたが私と共に、至る所で裁かれる証人たちを、〈そして〉各議会で裁判官たちの前に立たされる者たちを見るなら、あなたはイエス・キリストが各証人たちの中でどんな方法で裁かれるかが分かるでしょう。というのも、彼自身は、真理について証しする者たちによって裁かれる者だからです(ヨハ18:37)。そしてあなたはこのことを受け取るように説得されることでしょう、彼が次のように言うのを見るときに。すなわち、あなたが牢屋にいるときに、牢屋にいるのはあなたではなく彼自身であると、あなたが飢えているときに、飢えているのはあなたではなく彼自身であると、[あなたが渴いているときに] 渴いているのはあなたではなく彼自身であると[彼が言うのを見るときに]。「私は牢屋にいて、あなたがたは私のもとを訪れた」(マタ25:36)、「私は飢えており、あなたがたは私に食べさせた。私は渴いており、あなたがたは私に飲ませた」(マタ25:35)。それゆえに、もしキリスト者が何か別のものゆえにでもなく、自分自身の罪ゆえにでもなく、彼がキリスト者であるということゆえに裁かれるのなら、キリストとは裁かれる者だということになります。したがって、全地においてキリスト・イエスは裁かれるのです。またしたがって、キリスト者が裁かれる度毎に、キリストは裁かれる者だということになります。これらの裁判だけでなく、何かについて告訴される[べきであるところの]キリスト者が中傷されたと考えてみてください。するとそのときキリストは不当にも裁かれるのです。

「どんな者として私を産んだのか、全地において裁かれ、疑われる者としてか」(エレ15:10)。

(ラテン語訳)

「なぜ私を産んだのか、全地において裁かれ、隔てられる者としてか」(エレ15:10)。もしあなたが、有罪判決を下された、各教会から裁きの座へと引き出された証人たちを特に考えるなら、あなたはイエスが各証人を通じてどのような有罪判決を下されるかが分かるでしょう。というのも、彼自身は、神性の証言を証しする者たちの中で裁かれる者だからです。そしてあなたはこのことを確実に受け取るべきです、なぜなら、彼は次のように言ったからです。すなわち、あなたが牢屋にいるときに、牢屋にいるのはあなたではないと、あなたが飢えているときに、飢えているのはあなたではないと、[あなたが渴いているときに] 渴いているのはあなたではなく彼自身であると [彼が言ったからです]。彼曰く、「私は牢屋にいて、あなたがたは私のもとを訪れた」(マタ25:36)、「私は飢えており、あなたがたは私に食べさせた。私は渴いており、あなたがたは私に飲ませた」(マタ25:35)。それゆえに、もしキリスト者が何か別のものゆえにでもなく、自分自身の悪行ゆえにでもなく、彼がキリスト者であるというただそれだけのことゆえに有罪判決を下されるのなら、キリストとは有罪判決を下される者だということになります。このことから、全地においてイエスは有罪判決を下されるということになります、彼のために有罪判決を下される者が引き渡される度毎に。しかし、キリストはこの世の裁判人や、裁きの座の有力者たちの面前に引き渡されるだけでなく、もしキリスト者が誰かから中傷を受けて訴訟に呼ばれるなら、するとそのとき義人もまた不当に裁かれるのです。

あたかも、「どうして私を産んだのか、全地において裁かれ、隔てられる者としてか」(エレ15:10) というかのようです。

第8節

(ギリシア語)

(承前) 〈そして、さらに同様に、あなたは理解するでしょう、彼がどのように全地において裁かれ、疑われているのかを。〉では、誰がキリスト者たちの言葉を裁かないでしょうか。諸国民たちの誰が、たとえ簡単にであっても、それを調べないでしょうか。ユダヤ人たちの誰が、キリスト者たちに関することを言わないでしょうか。ギリシア人たちの誰が、哲学者たちの誰が、俗人たちの誰が〔言わないでしょうか〕。至るところでイエスは裁かれ、裁判をされています。そしてある者たちによっては有罪判決を下され、一方で、ある者たちによっては有罪判決を下されていません。もし彼が有罪判決を下されないなら、彼は受け入れられるでしょう。あなたは彼のために扉を開け、彼はあなたのもとへ入ってきます。あなたは彼を信じ〈、彼はあなたと共に食事をし〉ます(黙3:20参照)。もしあなたがキリスト教について聞いても〔それを〕受け入れないなら、あなたはイエスを、嘘をつく者〈として〉、人々を騙す者として、真実を語らない者として、有罪判決を下すに他ならないのです、彼が教える言葉を信じなかったことゆえに。「どんな者として私を産んだのか、全地において裁かれ、疑われる者としてか」(エレ15:10)。まったく信じない者たちがいればいるほど、彼らは彼に有罪判決を下します。一方で、信じないのではなく、彼について懐疑になる者たちがいればいるほど、彼らは彼について疑います。イエスは人々の中で二つのことを経験することになります。すなわち、彼は信じない者たちによって有罪判決を下され、一方で、二心ある者たちによって疑われるのです(ヤコ1:6、8)。もしあなたが「土からできた者のかたちを」片付けることで、「天上の方のかたちを」持っているなら(Ⅰコリ15:49)、あなたは彼に有罪判決を下す地でもなく、彼がその上で有罪判決を下される地でもなく、また彼を疑う地でもありません。

(ラテン語訳)

(承前) 他の方法によっても、私たちは理解することができます、イエスがどのように全地において有罪判決を下され、裁かれるのかを。邪悪な者たちの誰が、キリスト教的規律に有罪判決を下さないでしょうか。諸国民たちの誰が、何はともあれついでにでも、それを調べないでしょうか。ユダヤ人たちの誰が、キリスト者たちに関して言わないでしょうか。哲学者たちの誰が、無知な者たちの誰が〔言わないでしょうか〕。至るところでキリストは有罪判決を下され、裁定されています。そして確かに、ある者たちによっては有罪判決を下され、ある者たちによっては有罪判決を下されていません。しかし、もし彼が有罪判決を下されないなら、彼は受け入れられるでしょう。あなたは彼のために扉を開け、彼はあなたのもとへ入ってきます。あなたは彼を信じ、彼はあなたと共に食事をします(黙3:20参照)。もしあなたがキリスト教的規律について聞いてもそれを受け入れないなら、あなたはイエスを、嘘つきとして、世界を誤りへと引き込む誘惑者として、有罪判決を下すに他ならないのです。「どうして私を産んだのか、全地において裁かれ、隔てられる者としてか」(エレ15:10)。彼のことを完全に信じない者は誰でも、彼に有罪判決を下します。一方で、信じてはいるが、いまだに躊躇う者は、彼を裁きます。それゆえに、キリストは人々のもので二つのことを経験することになります。すなわち、彼は信じない者たちによって有罪判決を下され、躊躇う者たちによって裁定されるのです(ヤコ1:6、8)。もしあなたが地の者のかたちを脱ぐことで、天上の方のかたちを持っているなら(Ⅰコリ15:49)、あなたは彼に有罪判決を下す地でもなく、また彼はあなたの地で裁かれることも裁定されることもありません。

第9節

(ギリシア語)

「私の強さは、私を呪う者たちの中で衰えた」(エレ15:10)。使徒は救い主について、「彼は弱さのゆえに十字架につけられた」(Ⅱコリ13:4)と言っています。しかし、一方で、預言者はこれらと似たようなことを、次の箇所において言っています、「主よ、誰が私たちの知らせを聞いたのか。そして主の腕は誰に示されたのか。私たちは彼の前に、子供のように、乾いた地における根のように、[それを]知らせた。私たちは彼を見た、そして彼は外見も美も持っていなかったが、彼の外見は不名誉なものであり、人々の子よりも多く衰えた。傷と労苦の中にありながら、弱さに耐えることを知っている人。彼は自分の顔を不名誉から背けたため、名誉を奪われ、また考慮されなかった。この者は私たちの不法に耐え、私たちのために苦しんだ。そして私たちこそは、彼が労苦と傷と困窮の中にあると考えた。しかし、彼は私たちの不法ゆえに傷つけられ、私たちの罪ゆえに弱められた。私たちの平安の懲らしめが彼の上にあり、彼の打撲によって私たちは癒されました」(イザ53:1-5)。したがって、彼は私たちの罪の弱さを引き受け、私たちに耐え、自分を呪う者たちのところに来ました。そして彼の強さは、彼が天から降りてきたときに、[彼を]呪う者たちのゆえに衰えました。というのも、それと同時に、彼は僕の姿を引き受け、自らを無にしました、ちょうど使徒が「彼は自らを無にし、僕の姿を取った」(フィリ2:7)と言ったように。したがって、彼曰く、「私の強さは、私を呪う者たちの中で衰えた」(エレ15:10)。

第10節

(ギリシア語)

御言葉自身「彼の言葉」が許すならば、「私の強さは、私を呪う者たちの中で衰えた」(エレ15:10)という一節について、語られたことに従って、他の何かより明確なことをも言うこと

(ラテン語訳)

「私の強さは、私を中傷する者たちの中で衰えた」(エレ15:10)。使徒は私たちの救い主について、「彼は弱さのゆえに十字架につけられた」(Ⅱコリ13:4)と言っています。彼について、預言者は似たようなことを証言して、次のように言っています、「主よ、誰が私たちの知らせを信じたのか。そしてあなたの腕は誰に示されたのか。彼は彼の前に、子供のように、乾いた地における根のように、知らされるだろう。彼には外見も名誉もない。私たちは彼を見た、そして彼は外見も姿も持っていなかったが、彼の外見は不名誉なものであり、人々の子らに関して衰えた。傷と労苦の中にありながら、弱さに耐えることを知っている人。なぜなら、彼の顔は背けられ、軽蔑され、考えに入らなかった。彼は私たちの罪に耐え、私たちのために苦しんだ。そして私たちこそは、彼が労苦と傷と困窮の中にあると考えた。しかし、彼は私たちの不正ゆえに傷つけられ、弱められた。私たちの平安の懲らしめが彼の上にあり、彼の打撲によって私たちは癒されました」(イザ53:1-5)。したがって、彼は私たちの罪の弱さを引き受け、私たちに耐え、自分を呪う者たちのところに来ました。そして彼の強さは、彼が天から降りてきたときに、彼を呪う者たちのゆえに衰えました。というのも、それと同時に、彼は僕の姿を取り上げもしました。御言葉は肉にされた後で、自らを無にしました。そして使徒が「彼は自らを無にし、僕の姿を取った」(フィリ2:7) と言うのに従って。今でも、彼曰く、「私の強さは、私を呪う者たちの中で衰えた」(エレ15:10)。

(ラテン語訳)

しかし、彼自身が私たちに理解を与えてくれるならば、この言葉から、「まことの光があつた。その光はこの世に来て、すべての人を照らす」(ヨハ1:9) と語られた諸々のことについて

ができるかどうか、見てみましょう。「まことの光があった。その光は世に来て、すべての人を照らす」(ヨハ 1:9)。「まことの光」とは、神の子のことであり、彼が「世に来て、すべての人を照らす」のです。そして理性ある者はまことの光に与りますが、すべての人が理性ある者なのです。実際、御言葉に与るすべての人々のうち、ある者たちにおいては御言葉の強さが増しましたが、別の者たちにおいては衰えました。もしあなたが情念と罪にまみれた魂を見るなら、あなたはそこで御言葉の力が欠けているのを見るでしょう。一方で、もしあなたが聖にして義なる魂を見るなら、あなたは御言葉の力が毎日実をつけるのを見るでしょう。そしてあなたは、イエスについて語られたことを、義に適合させるでしょう。というのも、自分自身に関して「イエスは知恵、年齢、神と共にある恵み、そして人々において進歩した」だけでなく、知恵と年齢と恵みにおいて進歩を引き受けた者たちのそれぞれにおいても、「イエスは知恵、年齢、神と共にある恵み、そして人々において進歩した」からです。したがって、御言葉、神の子、「災いだ、母よ」およびその他のことを言う者の中にいる〈御方〉は、「私の強さは、私を呪う者たちの中で衰えた」(エレ15:10)と言います。御言葉を呪う者、そうした者は、御言葉を呪ったことゆえに、イエスの教えを軽視したことゆえに、直ちに罰を受けるのです。というのも、イエスの強さは、そうした者たちの中で衰え、また御言葉の強さはその者の中になからず。再度逆に言えば、もしあなたがイエスを賛美し、また彼を受け入れるなら、〈彼の〉強さは、彼が自分を呪う者たちの中で経験したこととは逆のことを経験します。というのも、彼がそこでは呪う者たちの中で衰えたように、ここでは賛美する者たちの中で増すのです。

より明確な、何か他のことをも言うことができるかどうか、見てみましょう。「まことの光」とは、神の子のことであり、彼が「世に来て、すべての人を照らす」のです。誰でも理性ある者はまことの光の関与者にされますが、すべての人が理性ある者なのです。それゆえに、すべての人々が理性ある者たちなので、ある者たちにおいては理性的な力が増しますが、別の者たちにおいては弱まります。もしあなたが悪徳で満ち、情動に隷属する魂を見るなら、あなたはいかに御言葉の力がそれに欠けているかを見るでしょう。もしあなたが聖にして義なる「魂」を見るなら、あなたは神の力がその中で毎日進歩し、大きくなるのを見るでしょう。そしてあなたは、イエスについて書かれているこのことを、それに適合させるでしょう。というのも、イエスは単に「知恵、年齢、神のもとにある恵み、そして人々において進歩していた」だけでなく、知恵と年齢と恵みにおいて進歩を引き受けた者たちのそれぞれにおいても、「イエスは知恵、年齢、神と共にある恵み、そして人々において進歩した」からです。したがって、言葉、神の子、御言葉としての神であり、「災いだ、母よ」およびその他のことを言う者の中に住まう御方は、ご自身の威厳の本性に従って、「私の強さは、私を呪う者たちの中で衰えた」(エレ15:10)と言います。もし誰かが御言葉を呪うなら、その者は直ちに報いを受け、拷問を経験するのです。というのも、イエスの強さは、理性が弱まるときに、その者の中で衰えるからです。逆に言えば、もし誰かがイエスを賛美し、また彼を受け入れるなら、彼の強さは、彼を呪う者たちの中で被ったこととは逆のことを経験します。というのも、彼が呪う者たちの中で衰えたように、賛美する者たちの中で大きくなるからです。

第11節

(ギリシア語)

「それが生じますように、主よ、彼らが真っ直

(ラテン語訳)

「それが生じますように、主よ、彼らが真っ直

ぐになるなら。そうでないなら、彼らの悪のときに私はあなたの傍に立った」(エレ15:11)。「それが生じますように、主よ」とは何でしょうか。できる人はご自分で、次のような言葉が「それが生じますように」と一緒になるようにさせてみてください。「主人よ、主よ、彼らが真っ直ぐになるなら」、呪う者たちの中で衰えた強さが生じますように、彼らが私を悪く言った後に〈悔い改めた者たちとして〉真っ直ぐさに向かい、それを旅するときにはいつでも。「それが生じますように、主人よ、彼らが真っ直ぐになるなら。そうでないなら、私はあなたの傍に立った」。それから彼は自分に悪口を言う者たちについて、自らを義とするのです、「そうでないなら、彼らの悪のときに私はあなたの傍に立った」と言いながら。彼は父の傍に立ったのです、「私たちの罪について」の「贖罪」となりながら(Ⅰヨハ2:2)。そして彼は私たちの悪のまさにそのときに、彼らについて懇願したのです。というのも、私たちの悪のときの後に彼が傍に立ったのではなく、私たちがまだ罪人だったときにキリストが私たちの代わりに死んだからです(ロマ5:6参照)。「そうでないなら、彼らの悪のときに私はあなたの傍に立った、彼らの苦難のときに、敵に対する善のために」(エレ15:11)。そして彼が言っているのは、敵に対する彼らの苦難のときに、私自身が彼らの代わりにあなたの傍に立ったということです。その敵とは誰でしょうか、私たちを苦難に遭わせた、「私たちの告発者である悪魔」(Ⅰペト5:8)でなくて、そして明らかに、人々に対する彼の憎しみのときに、私たちの救い主は父の傍に立ち、私たちの捕囚について望んだのです。それは、私たちが敵から贖われ、救われるためでした。こうしたことを救い主か預言者に言わせましょう。というのも、預言者もまたこうしたことを言うことができますし、彼らの悪のときに民について祈ることができるからです。

ぐになるなら。そうでないなら、彼らの悪のときに私はあなたの傍に立った」(エレ15:11)。「それが生じますように、主よ」と言われていることは何でしょうか。できる人は言葉そのものから考えてみてください。私に悪口を言っていた彼ら自身が真っ直ぐになるなら、主よ、彼らの中で衰えた強さが彼らの中に生じますように、彼らが悔い改めへと向かった上で、私について述べた悪口の後で、正しい道を旅し始めるときには。「それが生じますように、主よ、彼らが真っ直ぐになるなら。そうでないなら、私はあなたの傍に立った」。彼は自分に悪口を言う者たちになぜ指導や強さを求めるのか、理由を説明しています、「そうでないなら、彼らの悪のときに私はあなたの傍に立った」と言いながら。彼は父の傍に立ったのです、私たちの罪の代わりの贖罪として(Ⅰヨハ2:2)。そして彼は私たちの悪のときに、彼の〔赦しを〕懇願したのです。というのも、私たちの苦しみののときに後に彼が傍に立ったのではなく、私たちがまだ罪人だったときにイエス・キリストが私たちの代わりに死んだからです(ロマ5:6参照)。「そうでないなら、彼らの悪のときに私はあなたの傍に立った。そして彼らの苦難のときに、敵を立ち上がらせましょう。私は彼らの代わりにあなたの傍に立った」(エレ15:11)。しかし、私たちの敵とは誰でしょうか、私たちを苦難に遭わせ、隷属の軛で圧迫していた悪魔(Ⅰペト5:8)でなくて、この者〔悪魔〕に対抗して、救い主は父の傍らに立ったのです。そして私たちを捕囚から自由にしつつ、自由へと戻したのです。これらのことを主は預言者的に言いました。しかし、預言者もまた同じことを民のために言うことができたはずで、彼らの悪のときにさえ。

第12節

(ギリシア語)

これらのことについて、神は「何を」、預言者あるいはキリストによって告発された民に答え、また彼にこれらのことを言っているのでしょうか、すなわち、「鉄と青銅の囲いこそがあなたの強さである」(エレ15:12)、固く、強固で、追い出されることのない「強さである」、と。〈「鉄と青銅の囲いこそがあなたの強さである」、〉あなたの強さとは、何か切ったり分けたりするようなものであり、善いもののためではない強さなのです。

「そして私はあなたの宝を略奪品として与えるだろう、あなたのすべての罪〈ゆえ〉の代償として」(エレ15:13)。神は罪人たちのどんな宝を略奪品として与えるのでしょうか、そして「どんな」代償を彼らのすべての罪ゆえに彼らに与えるのでしょうか。次の二つのうちどちらなののでしょうか、一体、それらは彼ら自身によって地上に貯えられたものなののでしょうか。というのも、各人は貯えるからです、もしその者が悪人なら地上に、一方でもしその者が都会風なら天に、ちょうど福音から私たちが教えられているように(マタ6:19以下)。それとも、彼はかの民に「私はあなたの罪ゆえに、あなたの宝を略奪品として与えようとしているのだ」と言っているのでしょうか。かの民のどのような宝が略奪品として与えられるのでしょうか。見よ、エレミヤこそ宝のひとつであり、イザヤは別の宝であり、モーセもまた宝でした。これらの宝を神はかの民から取り、そして「神の国はあなたがたから取り上げられ、その実をつける民に与えられるだろう」(マタ21:43)と言うキリストを通じて、「その宝を」私たちに与えたのです。したがって、「私はあなたの罪ゆえに、あなたの宝を略奪品として与えるだろう」(エレ15:13)。そして彼はかの民の宝を私たちに与えたのです。というのも、まず彼らは「神の言葉を委ねられ」(ロマ3:2)、それから彼らの後に私たちがこそが「それを」委ねられました、なぜ

(ラテン語訳)

このことに加えて、神は、救い主あるいは預言者によって告発された民に答え、語っています、「鉄と青銅の囲いこそがあなたの強さである」(エレ15:12) と言って。それは固く、制御不可能であり、つまりそれは柔らかくされることを望まず、ほとんど生み出されないものです。「鉄と青銅の囲いこそがあなたの強さである」、すなわち、〔その強さとは〕何か切ったり分けたりするようなものであり、よく秩序付けられたものを混乱させるような、悪い意味での強さなのです。

「私はあなたの富やあなたの宝を略奪品として無償で与えるだろう」(エレ15:13)。神は彼らのすべての罪ゆえの代償として、それらを引き渡し、与えました。次の二つのうちどちらなののでしょうか、一体、それらは彼らが自分自身で地上に貯えたものなののでしょうか。というのも、各人は自分のために貯えるからです、もしその者が罪人なら地上に、もし義人なら天に、ちょうど福音が私たちに教えたように(マタ6:19以下)。それとも、彼が言っているのは次のようなことでしょうか、「見よ、エレミヤこそひとつの宝であり、イザヤは別の宝であり、モーセもまた宝だった、そして残りの者たちも」と。これらの宝を神は民から取り上げ、そして「神の国はあなたがたから取り上げられ、その実をつける民族に与えられるだろう」(マタ21:43)と言うキリストを通じて、「その宝を」私たちに与えたのです。したがって、「私はあなたの罪ゆえに、あなたの宝を略奪品として与えるだろう」(エレ15:13)。主はかの民の宝を私たちに与えたのです。というのも、まず神の雄弁は彼らに委ねられ(ロマ3:2)、それから私たちに付与されました。そして私たちは、「神の国はあなたがたから取り上げられ、その実をつける民に与えられるだろう」(マタ21:43)と書かれていることが果たされたことと主張しました。彼らから聖書が取り上げられたということではありません。

なら神の言葉は彼らから取り上げられ、私たちに与えられたからです。そして私たちは、「神の国はあなたがたから取り上げられ、その実をつける民に与えられるだろう」(マタ21:43)の一節が、救い主によって述べられ、かつ果たされたと言います。彼らから聖書が取り上げられたということではなく、むしろ今ではもはや彼らは律法と預言者を持っていないのです、なぜならそれらの中にある精神を熟考していないからです。というも、彼らは聖書を持てはいるのですが、ではどのように彼らから神の国が取り上げられたのでしょうか。聖書の精神が彼らから取り上げられたのです。もはや彼らのもとに律法的あるいは預言者的な解釈は保存されておらず、むしろ彼らはそれらを読んではいても心で理解していません。というも、次のことはキリストの臨在を通じて果たされたからです、すなわち、「私はかの民に言った、『聞くことによって、あなたがたは聞くが、決して悟らないだろう。見ているときに、あなたがたは見るが、決して理解しないだろう。なぜなら、この民の心は鈍くされたからである』」(イザ 6:9以下)。イザヤによって「次のように」言われたこともまた果たされました、すなわち、「主はユダヤとエルサレムから取り去った、強い男と強い女を、巨人と戦士を、義人、預言者、占い師、知恵ある建築士、そして理解力のある聞き手を」(イザ 3:1-3)。これらすべてを神はかの者たちから取り上げ、諸民族出身である私たちに与えたのです、少なくとも私たち自身が受け取るからです。これらのことは、「そして私はあなたの宝を略奪品として与えるだろう」の一節ゆえのことです。

「あなたのすべての罪ゆえの代償、そしてあなたの領域において」(エレ15:13)。これはあたかも、「あなたの領域全体に至ったあなたの罪ゆえに」と彼が言ったかのようです。というも、罪で満たされていないようなかの民の領域などないからです。ではどうすれば彼らのすべての領域が「これらのことについて」罪で満たされ

なぜなら、彼らは律法と預言者を持っており、聖なる書物の巻物を持っているからです。むしろ、彼らはそれらを理解していないからです。そしてこのように彼らから神の国は取り上げられました、なぜなら聖書の意味が取り上げられるからです。彼らのもとで律法と預言者の解釈が止まりました。彼らはすべてを読んではいても理解していません。次の預言は主の来臨の後に遂げられました、すなわち、「この民に言いなさい、『聞くことによって、あなたがたは聞くが、決して悟らないだろう。見分けているときに、あなたがたは見るが、決して知らないだろう。なぜなら、この民の心は太らされたからである』」(イザ 6:9以下)。そしてさらに、イザヤによって「次のように」言われていることもまた「遂げられました」、すなわち、「主はユダヤとエルサレムから取り去った、強い男と強い女を、巨人と戦士を、裁判官、預言者を、仲裁人、建築士を、知恵ある聞き手を」(イザ 3:1-3)。これらすべてを神はかの者たちから取り上げ、諸民族出身である私たちに委ねたのです、私たちが受け取るからです。「そして私はあなたの宝を略奪品として与えるだろう」。

「あなたの領域におけるあなたのすべての罪ゆえの代償を」(エレ15:13)。彼が言っているのは次のようなことです。「すなわち、領域全体に現れたあなたのすべての罪が、あなたに戻って来たのだ」[ということです]。というも、その罪で満たされていないようなかの民の領域などないからです。その領域のすべてが罪で満たされることもあり得ませんでした。その民は——それ[罪]が自分の中にある限り——、もしキリストが正義であるなら正義を殺し(Ⅰコリ 1:30)、もしキリストが知恵であるなら知恵を殺し(Ⅰコリ 1:24, 30)、もしキリストが真理であるなら真理を殺しました(ヨハ 14:6)。そしてそこから、神の子に対する残酷な叫びゆえに、彼らはこれらすべてを失ってしまいました。廻りつつ、我が主イエスは、自分の殺害者たちにはもはや現れず、むしろ勝利者として、自分を

る運命とならなかったことでしょうか、彼らは、もしキリストが正義であるなら——可能な限り——正義を殺し（Ⅰコリ 1:30）、もしキリストが知恵であるなら知恵を殺し（Ⅰコリ 1:24, 30）、もしキリストが真理であるなら真理を殺したにもかかわらず（ヨハ14:6）。というのも、神の子に死刑判決を下したことによって、彼はこれらすべてを投げ捨て、殺してしまったからです。しかし我が主イエスは、死者たちのうちから甦った後に、もはや彼を殺した者たちには現れませんでした。なぜなら、私たちは彼が自分を殺した者たちに現れたということ、歴史において持っているのではなく、むしろ彼は信じる者たちにだけ現れたのです、死者たちのうちから甦った後に（Ⅰコリ15:4-8、使 1:3）。

第13節

（ギリシア語）

「そして私はあなたが知らない地で、あなたの全ての敵たちの中で、あなたを奴隷にする」（エレ15:14）。かの民は敵たちの中で奴隷にさせられ、その民が知らない地で次のようなことが起こりました、すなわち、「私の怒りから火が点火され、あなた方に向かって燃えた」（エレ15:14）。

これらのことの後に、またその民に対して言われた脅迫の言葉の後に、上で祈った者は祈りを果たし、先に述べられた諸々のことに次のことを結び付けました、すなわち、「あなたは知っている、主よ、私を思い出し、私を注視してください。そして私を迫害する者たちから私の正しさを示してください、容赦なく」（エレ15:15）。そして預言者はこうしたことを言うべきです、〔彼を〕非難する者たちによって迫害されるときに、真理を掴まない者たちによって憎まれるときに。というのも、彼は、真理を聞く者たちにとって敵となったからです（ガラ 4:16 参照）。一方で、私たちの救い主もまたこうしたことを言うべきです、彼もまたその民から迫害され、容赦なくと言っているのですから。「容

信じる者たちだけに示されたのです、死者たちから（Ⅰコリ15:4-8、使 1:3）。

（ラテン語訳）

「そして私はあなたが知らない地で、あなたの全ての敵たちの中で、あなたを奴隷にする」（エレ15:14）。ユダヤ人たちの民は自分の敵たちに隷属し、その民が知らない地へと離散しました。私の怒りにおいて火が点火されるや否や、あなた方に向かって燃えた」（エレ15:14）。

私たちが説明したこれらのことの後に、また民に対する脅迫の言葉の後に、かつて祈った者は祈りを果たし、先の諸々のことに後に続くことを結び付けました、すなわち、「あなたは知っている、主よ、私を思い出し、私を注視してください。私を迫害する者たちから私を無実にしてください、容赦なく」（エレ15:15）。そして預言者はこうしたことを言うことができます、真理を聞こうとしないような、〔彼を〕非難する者たちによって迫害を受けたときに。というのも、彼は真理を述べることで、彼らにとって敵となったからです（ガラ 4:16 参照）。一方で、救い主もまたこうしたことを言うことができます、十字架に至るまでその民から「容赦なく」迫害を被ったのですから。「容赦なく」と彼が言っている一節はどうということなのでしょう。

赦なく」という一節はどういうことなのでしょう。あなたは常にその民に対し、その罪に関しては容赦しましたが、彼らが私に対して大胆なことに関しては、容赦しないでください。そして本当に神は容赦しませんでした。もしあなたが受難の、エルサレムの陥落の、都市の破壊の時のことを調べ、またどのようなやり方でかの民を――彼らがキリストを殺した後で――神が見棄てたのかを調べるなら、彼が容赦なくその民に振舞ったことを見るでしょう。しかし、もしあなたが望むなら、聞いてください。ティベリウス・カエサルの第15年目から神殿の破壊まで、42年が経ちました。というの、回心のためには、僅かでも、ある程度の時間が過ぎることが必要だったからです、とりわけ、使徒たちによってなされることになるしや兆しゆえに（使2:43参照）信じることになる、その民出身の者たちのために。

第14節

（ギリシア語）

「知ってください、あなたの言葉が無視する者たちによって、私があなたのゆえに罵倒を受けたことを」（エレ15:15以下）。これは預言者のことだとしましょう、このように語り、彼が言ったことゆえに軽視され、罪人たちによって無視されたのは。というの、彼自身が、「私は侮られ続けた」（エレ20:7）と言っています。したがって、彼を通じて神によって語られた言葉が無視する者たちによって、彼は罵倒されたのであり、また罵倒されることについて神によって助けられることを願い、「知ってください、あなたの言葉が無視する者たちによって、私があなたのゆえに罵倒を受けたことを。彼らを終わらせてください」（エレ15:15以下）と言ったのです。預言者がこう言ってもよいですが、「彼らを終わらせてください」という一節は救い主によって言われる方がより適切です。というの、終わりがエルサレムのもとに、またその民に来たのは、私たちの救い主に関するその民の陰謀か

それは、あなたは常にその民に対し、過ちを犯すことについては容赦をもって辛抱強かったですが、このことに関しては、私に対して自らの無謀さを立てさえたのであり、辛抱しないでください、ということです。そして本当に神は容赦しませんでした。というの、もしあなたが主の受難の、またエルサレムが破壊されたときのその滅亡の時のことを調べるなら、神がいかに容赦なく彼らを利用したかを見るでしょう。ティベリウス・カエサルの第15年目から神殿の破壊まで――というの、僅かでも、ある程度の時間が間にあったはずだからです――彼は容赦をもって〔彼らを〕見棄てたのです、使徒たちのしるしや兆しゆえに（使2:43参照）信じることになった者たちのために。

（ラテン語訳）

「知ってください、あなたの言葉を侮る者たちによって、どのように私があなたのゆえに恥辱を受けたのかを」（エレ15:15以下）。預言者がこのように語ったのは、彼が説教していたことに関して、罪深い民によって侮られたためだったかもしれません。というの、彼は他のところでも、「私は私の日々を嘲笑の中で終えた」（エレ20:7）と言っています。したがって、神の言葉を聞くことを侮る者たちによって、彼は恥辱を被ったのであり、また神の助けを得ることを願い、「知ってください、あなたの言葉を侮る者たちによって、どのように私があなたのゆえに恥辱を受けたのかを」（エレ15:15以下）と言ったのです。預言者がこう言うことは可能ですが、救い主にとってより相応しいのです、彼の受難の後に、エルサレムの滅亡が、ユダヤ民族の殺害が来しました。

このことの後で、御言葉の任務と、彼らが民に向けて述べた神の叱責のゆえに、預言者たち

ら起きたことだからです。

これらのことの後で、預言者たち——賞賛の言葉をも述べ、神によって命じられたことを語る預言者たち——が多くのことを経験したので、必要なことは、聞き手たちに、彼らの生について、彼らの約束について、そして私たちの選択について思い出させることです。その結果、もし私たちが、私たちにとって可能な限り、預言者たちと共に「永遠の」休息を持つことを望むなら、預言者たちの行動と張り合うことができるようになります。しかし、私が言っているのは次のようなことです。しばしば祈りにおいて私たちはこう言います、「全能の神よ、預言者たちと共に私たちの分け前を与えてください、あなたのキリストの使徒たちと共に私たちの分け前を与えてください、それは私たちがキリスト自身と共にまた見つけられるようにするためです。しかし、これらのことを言うとき、私たちは自分が何を祈るべきなのか分かりませんでした。というのも、実際に、私たちはこうしたことを言っています、「預言者たちが経験したことを私たちが経験するようにしてください。預言者たちが憎まれたように、私たちも憎まれるようにしてください。それによって私たちが憎まれるような、そのような言葉をください。使徒たちが陥った〈ほどの〉状況に遭わせてください」。というのも、「預言者たちと共に私に分け前を与えてください」と言うこと、それも預言者たちの「苦しんだ」ことを苦しまず、苦しもうともせずにそう言うことは、不正なことだからです。「使徒たちと共に私に分け前を与えてください」と言うこと、それもパウロの記述から正しく言えば、「苦勞についてはより大きく、傷についてはより強く、投獄については法外なほどであり、死ぬような目についてはしばしばだった」(Ⅱコリ11:23)等々と言おうとせずにそう言うことは、すべて非常に不正なことなのです。したがって、もし私たちが預言者たちと共にいたければ、預言者たちの生を見てください、というのも彼らは、訊問すること、叱責す

が多くのことを経験したので、聞き手たちは、彼らの生について、また約束について、そして私たちの意志について僅かでも思い出すべきです。それは、もし私たちが、能力の可能性に従って、預言者たちと共に「永遠の」休息を得ることを望むなら、彼らの行動をも行おうと努力するためです。しかし、私が言っているのは次のようなことです。しばしば祈りにおいて私たちはこう言います、「全能の神よ、預言者たちと共に私たちに分け前を与えてください、あなたのキリストの使徒たちと共に与えてください、授けてください、それは私たちがあなたの独り子の足跡へと見つけられるようにするためです。これらのことを言うとき、私たちは自分が何を頼んでいるのかを気づいていませんでした。というのも、私たちはこうしたことを言っています、「預言者たちが憎しみを持たれたのと同じように、私たちが憎しみを持たれるようにしてください。そして、それによって私たちが迫害を受けるような、そのような言葉をください。使徒たちが耐えたようなこうした災難に陥るようにしてください」。というのも、「預言者たちと共に私に分け前を与えてください」と言うこと、それも預言者たちが「苦しんだ」ことを苦しもうともせずにそう言うことは、非常に不正なことだからです。「使徒たちと共に私に分け前を与えてください」と言うこと、それもパウロの気持ちから、「苦勞についてはより多く、傷についてはより豊富で、投獄については法外なほどであり、死ぬような目についてはしばしばだった」(Ⅱコリ11:23)等々と言おうとせずにそう言うことは、非常に不正なことなのです。したがって、もし私たちが預言者たちと共に休みたければ、預言者たちの生を考えてみましょう、というのも彼らは、叱責すること、誤る者たちを告発することから、裁かれ、かつ有罪判決を下されました。「彼らは石で打たれ、切られ、剣の殺害によって倒れ、羊の皮や山羊の皮を被って歩き回り、困窮において、苦難と悲慘さにおいて、荒野で放浪した」(ヘブ11:37以下)。多くのシ

ること、怒鳴りつけることゆえに、裁かれ、裁判され、有罪判決を下されました。「彼らは石で打たれ、鋸で引かれ、試みられ、殺しによって剣で死に、羊の皮や山羊の皮を被って歩き回り、困窮し、押し潰され、虐待され、荒野で放浪した」(ヘブ11:37以下)、ユダヤ人たちの多くの会堂があったので。また彼らは「放浪した、荒野で、山で、穴で、地の割れ目で」(ヘブ11:38)。では、いったい何が異常なことなのでしょう、もし罪人を訊問し、怒鳴りつけることで預言者的な生を生きることを欲する誰かが、悪口を言われ、憎まれ、陰謀を企まれるなら。あたかも、現在も、神の教会に次のようなことが起こらなければならなかったかのようです。有罪宣告された者は有罪宣告されました。座っている誰かがそのようなことをしたのです。教會的な罰がなければなりませんでしたし、実際にありました。仕事を引き受けた者は、彼がすべきだったことをしました。その者は、真実を弁護する者を悪く言いながら歩き回っています。しかし、私たちとしてはこのことをしないでおきましょう。追い出されたために、彼らを追い出した者やそうなったことに同意した者を悪く言う者たちに、耳を貸さないでおきましょう。また不正すらも訊問されたり生じたりした者たち〈…〉。真理のために数えきれないほど侮辱された、驚嘆すべき使徒たちは、「私は、弱さ、侮辱と困窮、告訴と窮境の中であって、キリストのために喜んでいる」(Ⅱコリ12:10)と言っています。私が侮辱されているときにただ知るべきは、他の何者のためではなくキリストのために自分が侮辱されているということです。困窮にあるときに知るべきは、その困窮の基礎がキリストであるということです。私が罵られているときに知るべきは、罵りの原因が、神の言葉に従ってすべてが生じるために、私が真理を弁護し、聖書のために称賛を送ること——このことゆえに私は中傷されています——以外の何物でもなかったということです。そして、したがって、私たちとしては、可能な限り、預言者的な生を、

ナゴグがイスラエルにあった頃、それにもかかわらず彼らは隠れていました、荒野で、山で、洞窟で、岩の穴で (ヘブ11:38参照)。ではいったい何でしょうか。もし誰かが預言者たちの生を模倣したいなら、彼に罪人たちを叱責させ、告発させてください、すぐに彼は憎しみを得て、すぐに彼はそれについて傷つけられ、すぐに彼は陰謀を被ることでしょう。こうしたことは教会においてもしばしば起こるのを私たちは見ます。何であれ誰か——民を統治し、教会の規則を指揮する者——が犯した罪は、彼を聖者たちの会衆から直ちに追い出します。その者は都市へと巡回し、教会を守った者を——彼が自分自身の中にいる限り——打ち砕くのです。しかし、私たちとしては彼らに耳を貸さないでおきましょう、その放逐ゆえに、教会の全集会と同じくらいその指導者たちを激しい口調で引き裂く者たちに。しかし、真理のために数えきれないほど侮辱を受けた、あらゆる賞賛に相応しい聖なる使徒たちは、「それゆえに、私は、弱さ、暴言、困窮、迫害、窮境の中であって、キリストのために、私の気に入るのです」(Ⅱコリ12:10)と言っていました。ただ次のことに骨折ることが相応しいのです、すなわち、私たちがキリスト以外の他のいかなるもののためにも暴言に耐えないこと、また困窮の原因がキリストであることです。次のことを望みましょう、すなわち、罵りを経験したときに、私たちとしては真理のために——私たちはそれを弁護します——罵られたのだと知ること、そして聖書のあらゆる意図に従って、確信をもってそれを賞賛することです。したがって、私たちが可能な限り、預言者たちの生を、また使徒たちのふるまいを模倣することへと自分自身を広げましょう、煩わしさや危険を避けることなしに。というのも、もし競技者が試合の困難さから逃げるなら、彼は喜びと共に栄冠で飾られることはなく、また賞賛の栄光を得ることもないでしょう。

使徒的な生を得ようと努力しましょう、煩わしいことから逃げることなしに。〈というの、〉もし競技者が試合の煩わしさから逃げるなら、栄冠の甘美さが受け取られることはないでしょう。

第15節

(ギリシア語)

「そしてあなたの言葉は私にとって喜びとなるだろう」(エレ15:16)。「今なる」のではなく、「なるだろう」です。というの、現在のところあなたの言葉は私にとって、投獄、裁判、問題、誹謗、労苦ではありますが、それらの終わりには喜びとなるでしょう。「そしてあなたの言葉は私にとって喜びとなるだろう、そして私の心の楽しみとなるだろう。なぜなら、あなたの名前が私に呼びかけられたから、全能の主よ」(エレ15:16)。そしてたとえキリストが言っているのだとしても、父の御名が彼に呼びかけられたのです。

「私は彼ら笑い戯れる者たちの集いに座ったことはない」(エレ15:17)。もしこのとき預言者が、その集いが真面目な者たちではなく笑い戯れる者たちのものであることを見たなら、彼は笑い戯れる者たちの集まりに真面目に取り組むよりも、集まることを逃げ出した方がよいと考えました。したがって、笑い戯れる者たちの集いと真面目〔でない〕者たちの違いを自ら理解することが必要です。この集いは真面目なものであり、あらゆることを、また真面目さに相応しいことを真面目に行い、次のように言われていることに基づいています、すなわち、真面目さについては言葉が、真面目さについては生が、そしてすべてについては、笑い戯れる者たちではなく真面目な者たちの集いがある、と。しかし、その集いが、必要なことに関する真面目さを棄てて、この時代の競技や悪からの競技に没頭するとき、集いは笑い戯れる者たちのものになります。したがって、彼は「私は彼ら笑い戯れる者たちの集いに座ったことはない、しかし、あなたの〈手の〉面前を怖れた」(エレ15:17)

(ラテン語訳)

「そしてあなたの言葉は私にとって喜びとなるだろう」(エレ15:16)。「なる」ではなく、「なるだろう」と彼は言っています。というの、現在のところそれは私に、牢獄、追放、暴行、労苦を与えますが、これらのことすべての終わりは喜びとなるでしょう。「そしてあなたの言葉は私にとって喜びとなるだろう、そして私の心の楽しみとなるだろう。なぜなら、あなたの名前が私に呼びかけられたから、全能の主なる父よ」(エレ15:16)。そしてたとえキリストがこのことを言っているのだとしても、それは理解と相容れないものではありません。なぜなら、父の御名が彼に呼びかけられたからです。

「私は彼ら笑い戯れる者たちの集いに座ったことはない」(エレ15:17)。もしこのとき預言者が、その集いが注意深い者たちではなく笑い戯れる者たちのものであることを見ていたなら、彼は逃げ出したのです。したがって、注意深い者たちの集いと笑い戯れる者たちの「違い」を知ることが必要です。もし私たちのこの集いが注意深いものであるなら、もしそれがあらゆることを教会的な入念さをもって探し求めるなら、もし言葉が知識と共にあるなら、もし生が注意深いなら、もし仕事が用心と共にあるなら、集いは笑い戯れる者たちではなく注意深い者たちのものなのです。しかし、もしそれ〔集い〕が、宗教の熱意を棄てて、不正から来るこの世界に没頭するなら、集いは笑い戯れる者たちのものになります。したがって、預言者は「私は笑い戯れる者たちの集いに座ったことはない、しかし、あなたの手の面前を怖れた」(エレ15:17)と言っているのです。2つ——笑い戯れる者たちの集いに座り、あなたの威厳を損なうこと、

と言っているのです。提示されているもののうちの2つ——笑い戯れる者たちの集いに腰を下ろし、あなたに、つまり神に過失を犯し、あなたを満足させないこと、あるいは、笑い戯れる者たちの集いから起こされ、あなたにとって好ましいことをすること——について、私は笑い戯れる者たちの集いから立ち上がり、あなたにとって好ましくあることを選びました、逆のことをしてあなたの幸いに逆らう敵となることよりも。「私は彼ら笑い戯れる者たちの集いに座ったことはない、しかし、あなたの〈手の〉面顔を怖れた」(エレ15:17)。そして私たちの救い主は「彼ら笑い戯れる者たちの集いに」座らず、彼らから立ち去りました。そして、救い主が笑い戯れる者たちの集いから起こされることのしるしは、彼が「あなたたちの家はあなたたちによって見捨てられて荒れ果てる」(マタ23:38)と言ったことです。というのも、神の御言葉はユダヤ人たちの集いを棄て、他の集いや教会を、自分自身のために、諸民族からのものとして作ったのです。

第16節

(ギリシア語)

「私は独りで座っていた」(エレ15:17)。表現もまたここでは築き上げています。たくさんの罪人たちがおり、なおかつ義人が善く生きることにより彼らが耐えられないときに、悪の集いを回避して、「私は独りで座っていた」と言う者を模倣したり、エリヤが「主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を破壊した、そして私自身はたった独りで残された、そして彼らは私の命を取るためにそれを探し求めた」(ロマ11:3、I王19:10, 14も参照)と言っていることをも模倣したりすることは、おかしいことではありません。しかし、おそらくは、もしあなたが「私は独りで座っていた」という一節をより深く探求するなら、預言者的な深みに相応しい何らかの考えを見つかるでしょう。私たちが多くの者たちの生を模倣することで、それが孤

あるいは、確かにそのことから起き上がり、あなたにとって好ましいことをすること——が私に提示されているとき、私は、あなたの友となるために、笑い戯れる者たちの会衆から起き上がることを選びました、敵である者たちの間で考えに入れられるように逆のことをするよりも。「私は笑い戯れる者たちの集いに座ったことはない、しかし、あなたの手の面顔を怖れた」(エレ15:17)。そして私たちの救い主は「笑い戯れる者たちの集いに」座らず、自分が起き上がったことを告げつつ、「あなたたちの家はあなたたちによって見捨てられて荒れ果てる」(マタ23:38)と言いました。というのも、神の聖なる御言葉はユダヤ人たちの集いを棄て、他の集いを、自分自身のために、諸民族から集めたのです。

(ラテン語訳)

「私は独りで座っていた」(エレ15:17)。そして御言葉そのものが、説明さえなしに、聞く者たちを築き上げています。罪人たちの大群がおり、自らと共に義人が敬虔に生きることにより大群が耐えられないときに、そのときこそ、彼らの会衆を回避することが必要であり、「私は独りで座っていた」と言う預言者を模倣することが必要であり、「主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を掘り崩した、そして私自身はたった独りで残された、そして彼らは私の命を取るためにそれを探し求めた」(ロマ11:3、I王19:10, 14も参照)と悲しく叫ぶ者たちをも模倣することが必要です。しかし、もし私たちが「私は独りで座っていた」と言われていることにおいて、何かより聖なることを理解したいなら、おそらく聖霊に相応しい解釈を見

立したり、より強くなったり、多くの者たちから引き離されたりしないようにするときには、「私は独りで座っていた」と私は言うことはできず、「私は多くの者たちと共に座っていた」と[言います]。しかし、私の生が模倣しにくくなり、そのため、誰も私の習慣、言葉、実践、知恵に匹敵することができないほどに私が偉大になるとき、そのときこそ、私は「私は独りで座っていた」と言うことができるのです、なぜなら「私」だけがそのようであり、また誰も私を模倣することができないからです。したがって、あなたが長老でなく、あなたが司教でもなく、また何らかの教會的な評価によって評価されていなくても、このことを言ったり、「私は独りで座っていた」ということを熱心に追い求めたり、「私は独りで座っていた」と言うために生を取り戻したりすることができるのです。

「というのも、私は苦さで満たされた」(エレ15:17)。もし「命に通じる道が狭く狭められる」(マタ7:14)なら、あなたはこの生において苦さに満たされなければなりませんし、誰も甘さを享受することはできないのです。あるいは、あなたはあなたの祝祭が苦菜と共にあることを知らないのでしょうか。というのも、あなたが祝祭を祝うとき、「苦菜をのせた種なしパンを」(出12:8)あなたが食べるだろうと彼は言っています。神の祝祭を祝う者が苦菜をのせた種なしパンを食べなければならないということを、なぜ御言葉が言おうとしているのかが、知られるべきです。一方では、使徒が種なしパンのことを説明しましたが、それは私の解釈ではありません。他方では、その解釈に従っていることが使徒的な議論に匹敵することが必要です。使徒は、種なしパンに関する諸々のことを解釈して、「古いパン種ではなく、悪意や邪悪さというパン種でもなく、純粹さや真理という種なしパンで祭りを祝おうではありませんか」(Iコリ5:8)と言っています。種なしパンが純粹で真理であることに従って、苦菜についての説明を与える必要があります。純粹さと真理を持って

つけるでしょう。私たちが大群の生を模倣する——私たちのよりよい振舞いが人々から区別されず、またそれが、裁判官たる神が侮られているがゆえに、人間の害悪から区別されない——ときには、「私は独りで座っていた」と私たちは言うことはできません、なぜなら「私たちは多くの者たちと共に座っていた」からです。しかし、私たちの生が誰も感覚、言葉、実践に関して私たちに匹敵することはできないようなものとなると、そのときこそ、私たちは「私は独りで座っていた」と言うことができるのです。長老でなく、司教でもなく、助祭でもなく、他の何でも教會の威厳によって栄誉を与えられた者でもない者に、もしその者がよく生きるなら、「私は独りで座っていた、というのも、私は苦さで満たされた」と言うことが許されています。

もし「命に通じる道が狭く狭められる」(マタ7:14)なら、あなたがあらゆる甘さから離れることで、この世において苦さに満たされることが、あなたにとって役に立つのです。あるいは、あなたは、苦さが付加されることで、神の儀式が祝われることを知らないのでしょうか。というのも、聖なる御言葉は、あなたが祝祭の日を持つとき、「苦さをのせた種なしパンを」(出12:8)あなたが食べるだろうと言っています。しかし、神の過ぎ越しを行う者に苦味のある種なしパンを食べるように命じるこの命令が、何を求めているかということが、同時に考えられるべきだと私は思います。では、種なしパンに関する私の解釈は何でしょうか。使徒パウロは説明しました。しかし、後に続く苦味に関して、使徒的な議論に似ている何かが与えられることが必要です。それゆえに、使徒は、種なしパンに関して次のように、「古いパン種ではなく、悪意や放埒さというパン種でもなく、純粹さや真理という種なしパンで祭りを祝おうではありませんか」(Iコリ5:8)と言っています。苦さに関して、種なしパンが食べ尽くされるのと同じやり方でそれらが祝われるべきだと示すような説明が与えられる必要があります。純粹さと真理

ください、すると苦菜はあなたにあるでしょう、そしてあなたは苦菜と共に、純粹さと真理という種なしパンを食べるでしょう。ちょうどパウロが、純粹さと真理という種なしパンを食べたので、苦菜も食べたように。どのように彼は苦菜を食べたのでしょうか。曰く、「私はあなたがたに真理を語ったためにあなたがたの敵になったのか」(ガラ 4:16)。どのように彼は苦菜を食べたのでしょうか。「苦勞と骨折りにおいて、そしてしばしばある不眠において、飢えと渇きにおいて、他のものなしに」(Ⅱコリ 11:27以下)。あるいは、それは苦菜を添えた真理、苦菜を添えた種なしパンではなかったのでしょうか。したがって、律法が言ったのは、「苦菜を添えた種なしパンを」(出 12:8) 食べなさい、ということであって、「苦菜を添えた種なしパンを」食べなさい、あなたがたが満たされるまで、ということではありません。ちょうど他の〈どこか〉で「食べなさい、そして満たされなさい」(ヨエ 2:26)と語られたように。〈一方で、〉預言者はさらに進み、彼が苦菜を食べたではなく、「私は苦さで満たされた」(エレ 15:17)と言っています。私は可能な限り苦い物事の分け前を貰ったので、その結果、完全に苦菜の分け前を貰ったのです。

第17節

(ギリシア語)

「私を憎む者たちは何のために強くなるのか」(エレ 15:18)。彼は多くの問題を持ち、真実を聞くことを欲さ〈ない〉者たちに苦しみました。しかし彼らは彼よりも、ここでは、この世では、より力を持っていました、なぜなら神の国はこの世からのものではなく(ヨハ 18:36)、より力ある領域からのものだからです、ちょうど救い主が、「もし私の国がこの世界からのものだったなら、私の召使いたちが戦ったことだろう、私がユダヤ人たちに引き渡されないように」(ヨハ 18:36)と言うように。したがって、預言者を苦しめる者たちは、この世界では彼よりも強く

を持ってください、すると苦さはあなたに続くでしょう、そしてあなたは純粹さと真理を添えた種なしパンを食べるでしょう。パウロはそのような種なしパンを食べ尽くしていたので、苦さが彼に続いたのです、曰く、「私は真理を語ったためにあなたがたにとって敵になったのか」(ガラ 4:16)。彼が苦菜を食べたのは、悲しみにおいて、苦勞において、しばしばある徹夜において、飢えと渇きにおいてでした、世界全体の救いのために彼が負っていた他のものなしに(Ⅱコリ 11:27以下)。そしてそれらが苦さを添えた種なしパンを、真理の保護者としての彼に食べさせたのでした。そして、律法が確かに言ったのは、「苦さを添えた種なしパンを」食べ尽くしなさい、そして満たされなさい、ということですから、ちょうど他の箇所でもある者たちについて「食べなさい、そして満たされなさい」(ヨエ 2:26)と言われているように。しかし、預言者は「私は苦菜を食べ尽くした」ではなく、「私は苦さで再び満たされた」(エレ 15:17)と言っています。すなわち、世界の迫害のこれほどまでの重さが私にのしかかり、その結果、私は苦味で満たされたのです。

(ラテン語訳)

「私を悲しませる者たちは何のために強くなるのか」(エレ 15:18)。エレミヤは多くのことを耐えました、真理を聞くことを欲さない者たちから、この世では、彼よりも力を持っていた〔者たち〕から〔耐えました〕、なぜなら神の国はこの世からのものではなく(ヨハ 18:36)、生きている者たちの何らかの別の領域からのものだからです、ちょうど救い主が、「もし私の国がこの世界からのものだったなら、私の召使いたちが働いたことだろう、私がユダヤ人たちに引き渡されないように」(ヨハ 18:36)言うように。したがって、彼らは、この世では彼に敵対して

なるのです。というのも、彼らが強くなることについて、殉教者たちを見てください。裁判官は法廷で、裁いたり飽食三昧になったりしつつ座り、キリスト者——キリストはその者ために裁かれます——は、苦さで満たされ、不義によって圧迫され、有罪判決を下されます。

第18節

(ギリシア語)

「私の傷は重く、そこから私は癒されるだろうか」(エレ15:18)。私に勝る者たちは私を打ち、私の傷は重いです。あるいは、彼は自分自身の十字架を預言します(というのも、十字架は重い傷だからです、彼を十字架に架ける者に応じて)。〈あるいは、それは彼がそのために重い傷を受けるあらゆる義人たち〈に関して〉言われています。あるいは、預言者についてもこのことを聞いてください(というのも、彼は自分自身、預言に書き記されたことに苦しんだからです)。彼はこの意味を受け取ります、「私の傷は重く、そこから私は癒されるだろうか」と言う一節に従って。もし救い主が「そこから私は癒されるだろうか」と言うなら、その重い傷の後に死者たちからの復活を預言します。一方で、もしそれが義人から取られるなら、諸々の傷の後に再び癒しが訪れます。「それは私にとって、信仰を持たない〈偽の水のように〉になりました」(エレ15:18)。というのも、傷は留まるのではなく過ぎ去るからです。

「このことゆえに、主はこう言う、『もしあなたが立ち帰るなら、私はあなたを回復させさえしよう』」(エレ15:19)。これらのことが、自分に立ち帰るように神が呼び掛ける各々の者に対して再び言われています。しかし、ここでの「私はあなたを回復させよう」の一節には、神秘が明らかにされているように見えます。かつてそこにいたことがなければ、誰もある場所に回復されることはありません。むしろその回復は故

強くなるのです。そして義人が自らを迫害する者たちより弱くなることについて、殉教者たちの受難を見てください。裁判官は法廷の高い台で、げっぶと飽食三昧へと身を乗り出しつつ座り、キリスト者——キリストはその者の中に住まうのです——は、苦さで満たされ、死の危険に曝されています、その敵たちが自らに対して強くなる一方で。

(ラテン語訳)

「私の傷は確かであり、そこから私は癒されるだろうか」(エレ15:18)。私に勝る者たちは私に傷を与え、私の傷は確かです。あるいは主の十字架から、あるいは義人から、あるいは特にエレミヤから預言されたものとして、あなたが[このことを]受け取ろうとするなら、それは意味と矛盾しないでしょう。「私の傷は確かであり、そこから私は癒されるだろうか」。そして救い主は、釘の傷の後に自分の復活を告げ知らせながら、「そこから私は癒されるのだろうか」と言うことができますが、傷の後に健康を受け取る義人もまたそうです。「それ(傷がと解釈されます)は私にとって、信仰を持たない偽の水のようになりました」(エレ15:18)。というのも、私の傷は留まるのではなく私の上を過ぎ去るからです。

「それゆえに、主はこう言う、『もしあなたが立ち帰るなら、私はあなたを回復させよう』」(エレ15:19)。神はこれらのことを、彼が救いへと立ち戻らせたすべての者たちに対して言っています。しかし、彼が「私はあなたを回復させよう」と言っているところでは、何らかの神秘を表しているように見えます。なぜなら、自分がかつてそこから立ち去った場所以外においては、誰も回復されることはできないからです。それはちょうど、たとえば、もし私の体の手足が関節から外されたら、医者はそれをもとものと場所に回復させることを試みるようなものです。もし誰かが祖国から引き離され、追放へと

郷への〔回復〕なのです。それはちょうど、もし手足の関節が脱臼したら、医者が脱臼の回復をなすことを試みるようなものです。誰かが正当でも不当でも祖国の外にいて、再び祖国で諸々の法に従って生きることを得るなら、彼は自身自身の祖国へと回復されたわけです。自軍の部隊から追い出され、〈それでも〉回復された兵士についても、同じことが私に認められます。したがって、離反した私たちに対してここで彼が言っているのは、もし私たちが立ち帰るなら、彼が私たちを回復させよう、ということです。というのも、そうしたことは約束の終わりだからです、ちょうど使徒行伝に「神が自分の聖なる預言者たちの口を通して昔から語った、あらゆることの回復の時代まで」（使 3:21）と書かれているように、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠にある」（Ⅰペト 4:11）——において。アーメン。

送られ、そしてその後で、追放者たちを解放することのできる者たちの寛大さによって自由に戻されるなら、彼はそこから追い出されたところに戻るのです。兵士もまた、自分の戦列から投げ出されても、許可を受けるなら、戦列に回復されるのです。同じように、今のところでも、神に背を向けた死すべき種族に——すなわち、私たち人間に——言われているのです、「もしあなたが立ち帰るなら、私はあなたを回復させよう」と。というのも、約束の終わりは回復だからです、ちょうど使徒行伝で「神が自分の聖なる預言者たちの口を通して語った、あらゆることの回復の時まで」（使 3:21）と私たちが読むように、キリスト・イエス——「この御方に栄光と支配が永遠のうちの永遠にある」（Ⅰペト 4:11）——において。アーメン。